

石田梅岩著・城島明彦訳「都鄙問答」致知出版社 2016年9月25日刊を読む

学者の行^{ぎょうじょう}状・心得難きを問うの段

Q 1 : (1)あるところに、幼年期から学問をし、「四書五経」(『大学』『中庸』『論語』『孟子』の「四書」と『詩経』『書経』『礼記』『易経』『春秋』の「五経」)はいうに及ばず、どんな書物でも諳^{そら}んじてしまう優れた徳のある学者がいる。それほどの人物なのに、納得できないことが多い。一例を挙げるなら、金銭の借用面でだらしない点が多すぎるのだ。それでも、当人が儉約したうえで、二進^{にっし}も三進^{さっし}も行かなくなって借金するというなら話は別だが、そうではない。けじめがなく、他人にも迷惑をかけるというふうで、あまつさえ両親に仕える点でも、どこことなく感心できないところがあり、親の気持ちにそぐわないので、まずもって不孝者というべきだろうか。

(2)そもそも、その学者の行状を見てみると、知ったかぶりをし、態度は高慢ちき、弁舌は巧みだが、耳慣れない言葉を使いまくるので、とにかくわかりづらい。それに、どこことなく近寄りたがたい雰囲気があるので、十人いたら九人までが嫌っている。そういうことなので、親の気に入らないのも当然だという者が多い。「博学の徳」というべきものがありながら、このような愚行を重ねるといのは、どうしてなのか。

A : そのような疑問を呈するところをみると、あなたは「徳」ということをまったく知らないように思える。その学者が目指しているのは、徳を求める本来の学問ではない。そういう人物は、文字で遊んでいるという皮肉を込めて、“文字芸者”と呼ぶのだ。

Q 2 : ということは、書物を読むこと以外に学問があるということなのか。

A : 書物を読むことは、確かに学問である。しかし、書物を読んでも、文字の背後にある「心」まで理解しないと真の学問とはいえないのだ。聖人の書には、おのずと心が宿っている。その心を知ることを学問というのである。それなのに、文字面だけを目で追って、それでわかったような気になってしまうのは、単なる“一芸”にすぎない。だから私は、“文字芸者”といったのだ。

Q 3 : 同じ読書をするのでも、今あなたが二通りに分けたのは、どういう根拠に基づくものなのか。

A : (1)孔子が弟子の子貢^{しこう}にいった言葉に「子曰く、汝^{なんじ}は器^{うつわ}なり」(『論語』公冶長篇^{こうやちやう})というのがある。子貢は頭脳明晰で記憶力もよかったから、『論語』にも多く登場するが、その時点では、まだ徳を悟ってはいなかった。だから孔子は、「志はあっても、仁に至るまでは器だ」といったのだ。器は、一つの品目としての役割は果たすが、すべての用途には通じないのである。その子貢だが、志があったので、最終的には「本性」と「天道」について悟りを得、やがて「君子の徳」まで到達することになるのである。

(2)しかし、あなたがいう学者は、親に不孝をし、他人には嘘をついている。どちらも「不仁^{ふじん}」(仁に背き、慈愛の心が無い)ということである。文学という一芸にだけ精を出しているだけなので、“文字芸者”というしかないのではないか。

- (3) 徳とは、心で会得し、それを実践することをいうのだ。自分自身が得心できれば、おのずと父母には孝行をし、他人には嘘をつかなくなる。嘘をつかなければ、金銭の出し入れに関しても不正を働かなくなる。返すつもりのない金を借りるといこともしなくなる。たとえ餓死しようとも、義に背くような不正な物品を受け取ることもしない。まさに、『論語』(衛霊公篇)に書かれている「一生守るべき徳は何か」と尋ねた子貢に孔子が答えた「自分がしてほしくないことを人にしてはいけない」(己の欲せざる所は人に施す勿れ)である。
- (4) 自分の才能を他人に自慢せず、他人のよいところは見習うようにし、他人の悪いところに気づいたときには「自分にも、こういうことはないか」と気にかけて反省するなど、常日頃から「仁義に対する志」を持ち続けているのを「聖人の学問」というのである。
- 『論語』(雍也篇)に、「弟子の中で誰が一番学問好きか」(弟子孰れか学を好むと為す)と哀公(魯の王)に問われた孔子が、こういったと書いてある。
- 「顔回という名の者がいて、学問を好み、怒りを顔に表さず、同じ過ちは二度繰り返しませんでした。しかし、不幸なことに短命で、死んでしまいました。彼の死後、今に至るも、学問を好むという者を聞いたことがありません」(顔回という者あり。学を好み、怒りを遷さず。過ちを貳びせず。不幸短命にして死せり。今や則ち亡し。未だ学を好む者を聞かざるなり)
- (5) 顔回の心は、鏡が物を映すかのようである。右の怒りを左に移すようなことはしない。一度犯した過ちを、以後、二度と繰り返さなかったという。このように、心を会得し、さらに実践することを「徳に至る」という。したがって、孔子は、文学に長じていた弟子の子夏や子游を「学問好き」(好学)といわなかったのだ。詩書(『詩経』『書経』)、六藝(礼、楽、射、御、書、数の六つの芸)を学び、それらの道に通じていた孔子の弟子は七十人もいた。
- しかし、文学に通じてても、文学は徳の「作用」(働き)にすぎず、徳の「本体」(徳そのもの)ではないのだ。
- (6) あなたのいう学者は、長年にわたって書物を埋め尽くす文字に接し続けてはいても、眼光紙背に徹するところまでは至っておらず、肝心の「書物の心」を会得できていないために、親には不孝をし、人づきあいでは芳しくないことをするなど、義に反する行状が多くみられるのである。にもかかわらず、当人たちは、「文字さえ読めば、徳が身につく」と錯覚している。ゆめゆめ勘違いしてはならない。

P214 ~ 218

<コメント>

江戸時代の名著として名高い石田梅岩著の「都鄙問答(とひもんどう)」の全文訳が作家、城島明彦先生によりなされ、致知出版社から刊行された。江戸時代や明治・大正・昭和の各時代に漢文がある程度まで学んだ人であれば、容易に通読し大いに参考にした「都鄙問答」。しかし、難しい漢字や漢文がそのまま出てくるので、現代人にとっては難解を極め、必読書であることは承知していても、岩波文庫版の「都鄙問答」を簡単に最後まで読了、理解する人は少ない。このような状況の中、城島先生の本書は原文を文意に沿い全文現代語訳したもので有難い限りだ。岩波文庫版と併読し、石田梅岩の教えから学びたい。